

赤城祠碑について（改定）

先に青柳さんから詳しく解説されました。その多くは同意のものですが、若干見解の違いがありますので以下に述べます。

まず、祠碑に刻まれている内容を要約すると、冒頭に「建長年間に赤城山が自燔、土壌が崩壊して流山村に流れ着いた。その場所は祠のある所である。村の古老は赤城大明神を祀り正一位を賜った」とあり、以降は代官川崎定安が逆川の改修を行ったので、村人古老は代官の徳を称え、碑を造ったが文化9年夏の洪水で流された。その後川崎代官は坂川の改修を進め松戸駅、さらに国府台まで延伸させた。水は坂を流れる如く流れ新田も開発され公私ともに利益を得た。多くの恵みを貰った村の古老たちは、代官の不朽の功績を称え、碑を建てた」というもの。

以上から碑は、川崎定安代官の坂川改修の功績を村人が称え建立した、としているが、文面からは書き手（久保筑水）が定安を一方向的に賛辞しているもので、村人が自ら建立しようとしたものとは取れない。おそらく定安に頼まれて書いたのであろう。そして、建立する場所を赤城神社とするために、冒頭に流山の由来を持ってきたものと思う。

しかし、この碑にはいくつかの疑問がある。

- ① 碑文には、逆川を国府台まで伸ばし「水は坂を流れ下る如くになった」とし、逆川から坂川としている。『流山のむかし』によれば、文化10年の改修では松戸駅までで、国府台まで伸ばし完成したのは天保6～7年である。
- ② 川崎定安は文化10年3月4日に病死しているから、国府台までの工事は担当していない。
- ③ 碑文は定安生存中に書かれたが、定安が死んだのでそのままになっていた。しかし、坂川が完成したことで、碑文を書き直し定安に応えようとしたのではないか。そうすると、碑文には文化11年とあるが、実際には天保6～7年以降に書いたとすることができる。筑水は天保6年7月13日に死去しているから、死の直前に書いたことになり、坂川の完成は天保6年7月以前と言える。
- ④ しかし、代官は変わっていて偽証の撰文など、次の代官や寺社奉行が許可するとも思えない。村人の発案でないものを積極的に建立するはずもない。筑水が撰文した後すぐに死んだとすれば、誰が碑を作ったか。定安が死んでから20年後の撰文とすれば、おそらく碑は造られていなかったのではないか。
- ⑤ 以上からもし赤城祠碑があったとしても、打ち捨てられていたとも考えられる。それよりも、碑文の撰書が残っていて昭和32年に碑にした可能性が高い。しかし、そのようなことは言えないから、古くからあったことにして口をつぐんでいるのかもしれない。

私的見解

碑は文化11年に建てられたものではない。建てられたとすれば天保6年以降であるが、いつ建てたか、建てられなかったかも不明である。初代か2代かについては、碑文にある初代はなかったと見るべきで、現在あるのが初代であると考えられる。

流山伝説は碑文が先か伝承が先か。伝承が先と考えるが、建長年間については碑文が先ではないか。伝承は自然に生まれるもので、村人が吾妻鑑を引用したとは考えにくい。